

10. コツバメ	<i>Ahlbergia berrea</i> Butler	<i>Chrysozephyrus smaragdinus</i> Bremer
		1963. 7. 25 (常室)
11. ジョウザンミドリシジミ		<i>Neoyeophrys toxila japonicus</i> Murray
	<i>Favonius cognatus</i> Shirôzu	1963. 7. 7 (常室)
12. エゾミドリシジミ		<i>Strymonidia w-album fentoni</i> Butler
	<i>Favonius jezoensis</i> Matsumura	1963. 7. 25 (常室)
13. オオミドリシジミ		<i>Lycaena phlaeas daimio</i> Seitz
	<i>Favonius orientalis</i> Murray	1964. 6. 7 (常室)
14. メスアカミドリシジミ		(浦幌町農業協同組合農産課勤務)
		1965. 7. 12 (常室)
		1965. 7. 22 (常室)

浦幌町における蝶類の出現期

円子紳一

浦幌町に生息する蝶類については、すでに浦幌町郷土博物館報告第2号(1973年)、第6号(1975年)でそのほとんどが報告されている。(円子1973、松本1975) ほとんど記したのは、まだ発見される可能性のある種があるからである。

さて、今回は報告というよりは断片的ではあるが、過去5年間の調査で得た記録に基き、浦幌町に於ける蝶類の出現期について推察してみた。

普通、私達の生活の中で蝶類の姿を認識するのは、ワラビ採りも終りに近く、野山に草花が咲き乱れる頃から秋祭りまでの間ではないだろうか。誰もが戸外に出て生きていることの喜びを、短かい北国の夏を満喫している時には、自分の廻りを見つめることができる。しかし、冬になると人々は家の中に閉じ籠ることしか考えなくなる。そして何時しか虫達のことを忘れている。

余談はさておき残雪の3月末に、クジャクチョウが姿を現わす。これは単年度だけの記録ではなく、1971・72・74年の3ヶ年の記録である。中でも1971年は3月22日と現在までの最も早い記録を残している。他の種の出現がそれほど早くなかつたことからも、この年の冬が特別暖かかった訳でないと思う。

エルタテハも3月末に出現しているが、これは

1974年3月31日の記録である。ここで注目したいのは、3月下旬に出現しているのはこの2種だけだということである。しかも、共に越冬態は成虫である。しかし、これだけで成虫で越冬するから発生が早いと考える訳にはいかない。浦幌に産する蝶で成虫越冬するのは、両種の他にシータテハ、アカタテハ、キベリタテハ等6種がいる。これらは5月中旬を過ぎなければ出現していない。むしろ蛹で越冬するモンシロチョウより遅いのである。なぜそうなるのかは、残念ながら筆者の持ち合わせている資料からは、知ることができない。

ただ筆者の推測であるが、休眠と温度の関係が考えられる。いわゆる越冬するということは、休眠状態に入ることである。この休眠を覚ますのは脳が温度変化により活性化され、脳ホルモンの分泌が盛んになるからと考えれば、同じ成虫で越冬しても、種個々の条件に合った気温になるまで活動しないだろうし、それが出現期のずれ込みになるだろうと考えられる。ともあれ推測である。

現在までに浦幌で採集された蝶は、浦幌町郷土博物館報告第6号で松本尚志氏が報告している通り80種近くになっている。これらの全てについて一度に載せるには無理があるので、数回に分けて話したいと思う。今回は、本町産で最も大形のア

ゲハチョウ科について推測してみたい。

浦幌町内で確認されているのは、ウスバシロ、ヒメウスバシロ、アゲハ、キアゲハ、カラス、ミヤマカラスの6種である。十勝管内ではこの他にウスバキチョウ（大雪山）、ヒメギフチョウ（新得町佐幌岳）、オナガアゲハ（上士幌町）の3種が加えられる。ヒメウスバシロとウスバキチョウは北海道特産種で、特にウスバキチョウは高山植物のコマクサを食草とし、大雪山系のみに生息し3年がかりで羽化するため個体数も少なく、国の特別天然記念物に指定されている。

ウスバシロチョウとヒメウスバシロチョウの出現期はほぼ一致しており、6月中旬から7月上旬までの1ヶ月間に限られている。これはおそらく彼等の幼虫が食草としているエンゴサク科の生育過程の影響によるものと思われる。

カラスアゲハとミヤマカラスアゲハは共にキハダ等ミカン科を食樹としている。浦幌においてはミヤマカラスが5月中旬から8月中旬、カラスアゲハが6月上旬から9月下旬と、その出現期に1ヶ月ほどの差がある。道内においては両種共年2回発生するが、カラスアゲハは高地帯では年1回の発生にとどまっていることが知られている。このことから、浦幌においてカラスアゲハの出現が遅いということは高地帯並の年1回の発生でしかないと考えられ、今後の調査が必要である。

キアゲハは、アゲハの中でも最もポピュラーな種で、カラスアゲハと共に庭先のユリの花にいつでも訪れて来てくれる。年2回の発生で第1化（春型）は5～6月、第2化（夏型）は7～8月である。Table 1では7月上・中旬が空白となっているが、採集しようと思えば可能だと思う。しかし、個体数が極めて減少し、第1化から第2化に移行する時期であろうと思われる。

最後にアゲハであるが、本種は浦幌においては極めて稀な種であり発見するのはまったく偶然と言っても過言ではない。筆者も採集できたのは1971年6月12日（万年）の1頭だけであり、目撃できたのも2回程でしかないので、出現期について記すにはあまりにも資料不足である。

1975年の秋（10月末頃）、筆者の家の庭に植えてあるミカンの葉にアゲハの終令幼虫を発見した。1年中必死になって探し回っても見つけることができなかったアゲハが、いつのまにか我家の庭に訪れ産卵していった。鮮やかな黄緑色をした幼虫が3頭ミカンの葉を食べているのを見て、来年無事に成虫として飛び立ってほしいと願いながら見守っていた。同じ頃ニンジンの葉にキアゲハのこれも幼虫が10数頭群れていた。ある日、霜が降りて心配により見に行つたが既に両方の幼虫の姿はなく、どこかで蛹になり越冬の準備をしているだろうと思う。

ほとんど推量の形で記したために物足りなさを感じるが、これらの問題を提起して、これから調査活動の踏み台としたい。

（浦幌町農業協同組合農産課勤務）

引用文献および参考文献

- ①円子紳一（1973）「浦幌町の蝶類レポートⅠ」
（『浦幌町郷土博物館報告』2）
- ②松本尚志（1975）「浦幌町に於ける蝶類の分布」
（『浦幌町郷土博物館報告』6）
- ③白水 隆（1971）『原色図鑑日本の蝶』
- ④藤岡知夫（1972）『図説日本の蝶』
- ⑤日高敏隆（1973）「ギフチョウ—23度の秘密」
（『アニマ』2）
- ⑥牧野富太郎（1970）『牧野新日本植物図鑑』

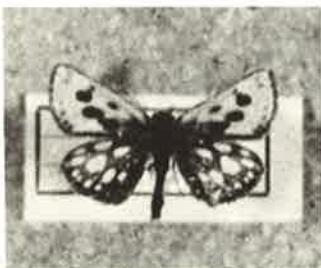
種類	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	越冬態
ウスバシロチョウ				---						卵
ヒメウスバシロチョウ				---						"
カラスアゲハ			---	---	---			---		蛹
キアゲハ			---	---	---	---	---			"
ツマキチョウ			---	---						"
モンキチョウ	---		---	---	---	---	---	---		幼虫
モンシロチョウ			---	---			---	---		蛹
エゾスジグロチョウ			---	---	---	---	---	---		"

種類	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	越冬態
エゾシロチョウ				—	—					3令幼虫
キマダラヒカゲ				—	—					蛹
シロオビヒメヒカゲ				—	—					幼虫
ヒメウラナミジャノメ				—	—					5令幼虫
クロヒカゲ				—	—			—		4令幼虫
ウラジャノメ				—	—					"
ジャノメチョウ				—	—					幼虫
オオヒカゲ				—	—					"
ミヤマセセリ			—							蛹
チャマダラセセリ			—							虫
コキマダラセセリ			—							幼蛹
コチャバネセセリ				—	—					虫
キバネセセリ				—	—					成虫
クジャクチョウ			—	—	—			—		"
エルタテハ	—	—			—					蛹
アカマダラ		—	—							"
サカハチチョウ			—	—						虫
コムラサキ				—	—					"
カラフトヒョウモン			—	—						卵・幼虫
ウラギンヒョウモン				—	—					"
ギンボシヒョウモン				—	—					"
ミドリヒョウモン				—	—					"

Table 1 浦幌町における蝶類の出現期

カラフトタカネキマダラセセリの発見及びその採集について

松本尚志



『浦幌町郷土博物館報告』第6号に、「浦幌町に於ける蝶類の分布」を掲載していただいたが(松本1975)、新しい生息の確

1. 新しい確認は、カラフトタカネキマダラセセリの発見と採集である。1975年6月11~17日、場所は万年及び東山で笹の葉上にとまっているものを採集した。短い期間であるが、かなり多産するようである。

2. 浦幌町郷土博物館報告第6号7頁からの「十勝管内隣接町村蝶類分布表」について、次のように付け加えたい。

認と補足を加えたい。

十勝管内隣接町村蝶類分布表

No.	種名	上士幌	陸別	足寄	本別	浦幌
	セセリチョウ科					